東奥日報　2013年（平成25年）12月29日　日曜日

郷土音楽資料 生かそう

協会収集の2千点 県立図書館保存

県民利用へ 体制整備

本県に関わる音楽資料の収集・保存活動を進めている民間団体の県音楽資料保存協会（大嶋和久会長）の活動が丸10年となり、収集資料は、本県出身の演奏家や作曲家、関係者らから寄託された楽譜類、録音・映像物、出版物など2千点近くに上っている。大半は暫定的に青森市の県立図書館に保管されてきたが、県立図書館は新年度から資料を恒久的に保存し、閲覧や貸し出しができる体制整備に着手する。関係者は「貴重な資料の活用の道が開かれた」と、新たな展開を歓迎している。

（相木麻季）

保存協会などによると、図書館を拠点とした郷土音楽資料の保存事業は全国的にも珍しい。県立図書館は、音楽的な専門知識を有する同協会と連携して事業を進める方針。

収集資料は戦後を中心に、クラシック、合唱曲、民俗芸能など時代も分野も多岐にわたる。例えば、青森市出身のバリトン歌手萩野昭三さん、作曲家川崎祥悦さんら本県出身の音楽家に関する音源や楽譜、書籍類、方言詩を基にした合唱曲、わらべ歌を楽譜に起こしたもの、県内の合唱演奏会の収録レコード、合併前の市町村がまちおこしで制作した歌や、学校統廃合が進む前の小中学校の校歌の資料などがある。

県立図書館に保管されている郷土音楽資料の一部。楽譜、書籍、パンフレット類、レコード、CD、カセットテープなどが並ぶ

これまでは所有者からの寄託品として保管していたため、一般の閲覧や貸し出しを厳しく制限していた。来年4月以降は所有者の承諾を得て、県立図書館への寄贈品とし、同館が主体的に保存、活用できる体制を整える。

同館は資料の一点一点について目録の整備を進め、図書館の既存の情報検索システムに組み込んでいく方向。鉛筆書きの自筆の楽譜などのデジタル化も検討する。

新たな作業で生じる人員については、専門知識を持つ保存協会との連携を探る。収集資料に含まれる複製品の取り扱いなど、著作権法上の課題などにも取り組む。

同館の黒滝雅信奉仕課長は「未経験な部分もあるが、貴重な資料を県民に広く利用してもらえるよう、協会と話し合いながら整備を進めたい」と語り、大嶋会長は「協会としてできる限り協力していきたい」と前向きな姿勢を示している。

県内の合唱団の指揮などで活動する大嶋会長は「郷土の音楽資料が1カ所に蓄積されていることが情報発信できるようになれば、演奏家や研究者などのさまざまなリクエストに応えられるし、新たな情報や人の輪が広がる可能性がある。青森ゆかりの音楽作品の演奏会なども企画できるのでは」と期待する。

保存協会は、散逸の危機にある郷土の音楽資料を守り、本県の音楽文化の発展につなげようと県内の演奏家や音楽団体関係者などで2003年に発足。現在、会員は賛助会員を含め22人。ホームページでこれまでの活動記録や入会案内などを紹介している。